

時空間文脈手掛かり効果における課題依存性の検討

—課題無関連刺激である色が文脈手掛かり効果に及ぼす影響について—

奥村 円香

潜在学習とは、学習意識や意図がない中でオブジェクトの関係性や規則性が無意識的に学習されるという現象のことである。その潜在学習の1つの現象として文脈手がかり効果がある。文脈手がかり効果とは、視覚探索課題中に同じレイアウトでの刺激提示が繰り返されたときに、このレイアウトを実験参加者が潜在的に学習して、繰り返されていないレイアウトで刺激が提示される場合に比べ、探索時間が有意に速くなるという現象のことである。この文脈手がかり効果は注意を向けたオブジェクトの規則性のみが生じることがこれまでの研究で示されており、文脈手がかりとして学習されるべき規則性(配置レイアウトや系列配置)に注意量が多く向けられると、より文脈手がかり効果が生じやすくなると考えることができる。これまで、文脈手がかり効果と注意の研究はたくさん行われているが、どのくらいの量の注意を向けると文脈手がかり効果が起こるのかについての検討はほとんどなされていない。また、Higuchi, Ueda, & Saiki(2016)の研究によって、文脈手がかり効果において、課題の目的に関係のある規則性は、課題の目的に無関係である規則性よりも注意が誘導され学習される(課題依存性)ということがわかった。

そこで本研究では、文脈手がかり効果において、ヒトは課題の目的に関係する規則性を優先的に学習するのかという課題依存性の確認と、課題無関連刺激の文脈手がかり効果への影響について検討を行うことを目的とした。Higuchi et al. (2016)の時空間文脈手がかりパラダイムに、課題の目的に無関係な情報として刺激の色を加え、この色が注意を引きつけてより強く文脈手がかりを学習されることでより顕著な課題依存性が生じると考えた。

本実験では、課題依存性についての検討を行うために異なる目的の視覚探索課題をしてもらった2群を設けた。それぞれの課題では場所とアイデンティティ(刺激の種類)という2種類の規則性が存在しておりそれぞれを学習段階で学習させ、最後にあるテスト段階で、アイデンティティか場所どちらかの規則性を入れずに刺激提示を行って視覚探索をさせ、課題依存性を確かめた。また、色あり・色なしどちらの刺激も参加者内で設け、色が課題成績に及ぼす影響についても検討した。

実験の結果、アイデンティティの規則性の学習を期待された群では、場所の規則性がなくなったときに正答率が下がった。また、場所の規則性の学習を期待された群では、アイデンティティか場所かの規則性ではなく、色情報がなくなったときに反応時間が長くなった。

また、色情報がない刺激に対しては反応時間・正答率ともに規則性の有無による変化がなかった。

以上の結果から、色の効果に関しては、文脈手がかり効果において、色の存在により文脈手がかりに対する注意量上がり、注意量を上げることにより、学習が顕著に進むということが示された。また、課題依存性に関しては、結果が一貫しなかったため、本当に生じるのかどうかについては今後、さらに研究されていく必要がある。(応用認知心理学)